

(様式第3号の1)

博士(甲)論文審査及び最終試験結果報告書

平成26年 3月4日

文学研究科委員会 殿

論文審査及び最終試験委員

主査 宮川 美佐子 印

副査 向井 剛 印

副査 太田 一昭 印

論文審査及び最終試験の結果を下記のとおり報告します。

記

専攻及び課程	学籍番号	氏名
英文学専攻博士後期課程	07英博後1	石田 由希
審査論文題目	エリザベス朝演劇と現代イギリス演劇にみるメタドラマ	
論文審査及び 最終試験報告	⊕ 否	
博士論文提出資格取得日	平成 23年 3月 8日	
博士後期課程退学日	平成 23年 3月 31日	

論文審査及び最終試験結果の要旨

論文題目：『エリザベス朝演劇と現代イギリス演劇にみるメタドラマ』

提出者氏名：石田 由希

論文概要：

イギリス演劇をめぐる本研究は、「メタドラマ」をテーマとし、この主題が〈世界劇場〉として流行したエリザベス朝演劇と、そのエリザベス朝演劇を翻案した 20 世紀イギリス演劇を論じる。論文前半では、シェイクスピア、トマス・ミドルトン、ウィリアム・ローリーの劇を、後半では、現代イギリス劇作家のトム・ストップードとサラ・ケインの戯曲を読み解く。各劇に当てられた 7 つの章は、それぞれ独立した作品論になっている。同時にこれらの作業全体を通して、ふたつの時代における演劇的自意識を相対化させ、個々の意味づけを行う。

序章では、メタシアター／メタドラマ概念の先行研究を概観し、本論で「メタドラマ」が意味するところを、「劇中劇」、「劇中の演劇的儀式」、「役の中の役割演技」、「自己言及」と定めた。

第一部の前半は、シェイクスピア作品を対象とする。第 1 章では、初期悲劇『タイタス・アンドロニカス』における時間の寓意的パフォーマンスを読み解くことで、作品全体における演劇的な〈儀式〉の構図を明らかにする。続く第 2 章の『尺には尺を』論では、為政者によって構築される〈劇中劇〉的世界が、作中社会の監視システムを近代化する役目を担うという点を指摘している。一方で、そのシステムに抗う者の存在にも留意している。

第一部後半は、シェイクスピアの同時代作家による作品を扱う。第 3 章では、最近ではミドルトンの作とされることの多い『復讐者の悲劇』を巡り、謀反の手段に利用される〈宮廷仮面劇〉と、主人公の〈仮面劇作家性〉を分析する。本作に登場する暗殺のプロットは、通常の仮面劇のパロディとして機能している。第 4 章では、ミドルトンとローリーの共作悲劇『チェンジリング』を取り上げる。精神病患者の姿を商品化するという副筋の設定を踏まえた上で、副筋と表裏を成す主筋に込められた見世物的な〈劇中劇〉を扱う。

第二部は、メタドラマという概念が確立する 20 世紀後半に活躍した現代イギリス劇作家の作品を対象とする。第 5 章は、トム・ストップードの『ローゼンクランツとギルデンスターンは死んだ』の〈自己言及〉と〈劇中劇〉が、観客に眩暈のような感覚を与えるという点を、ロジェ・カイヨワの〈遊び〉の理論を用いて検証している。第 6 章では、20 世紀の美術史に目を配りながら、同じくストップードの推理喜劇『本物のハウンド警部』に登場する〈劇場〉と〈劇評家〉に着目し、それらの演劇的モチーフに備わる象徴性を解説する。第 7 章のケインの『クレンズド』論は、男装するヒロインの特異性を読み解き、その人物の在り方が劇世界全体の縮図であるばかりか、演劇そのものの寓意として解釈できるという説を述べている。

終章では、エリザベス朝と現代の演劇におけるメタドラマの差異を、本論で取り上げた作品の範囲で論じた。第一部で扱ったエリザベス朝演劇のメタドラマが、作品世界の腐敗を〈浄化〉する役目を負う一方、第二部で論じられた現代イギリス劇のメタドラマは、観客に〈眩惑と混迷〉を提供している。最後にこの章は近年の英米演劇に触れ、それらの作品が演劇のジャンルや形式そのものを主題化しているという指摘を加え、論を結んでいる。

講評：

メタフィクションは 20 世紀後半に注目された概念で、作家たちが意識的に作品に取り入れて、広く研究の対象ともなり、現在では欧米近代文学の基本的用語の一つとなっている。演劇においては、16～17 世紀英国の演劇がこの概念を先取りしていることが従来より指摘されてきた。本論文の全体としての特徴は、メタドラマが中心的モチーフとして現れる単一の時

代ではなく、16～17世紀と20世紀の両方の時代を扱ったことと、対象とした作品の範囲内で、それぞれの時代的特徴を比較考察したことにある。

序章においては、メタドラマの批評史を振り返り、先行研究に十分な目配りをしていることを納得させる。基準となるエイベルの研究を消化したうえで、その曖昧な点、不適切と思われる点を指摘し、メタドラマの意味を再定義している。また、従来は単独の作家論・作品論が多いなか、二つの時代を対比させるという、自己の研究の意義にも自覚的である。同様に、すべての章において、対象作品の、メタドラマ性に関わる先行研究の概観を示したうえで、自分の論文の特徴と意義を明示している。

対象とする作品については、第1部が未だ作品解釈に興味深い余地を残すエリザベス朝の作品、第2部がシェイクスピア作品を材源とする現代作品ということで、その選択には合理性があると認められる。特に、あらゆることが言いつくされている感のあるシェイクスピアの作品について、比較的注目されてこなかった二作品を取り上げ、メタドラマ性の分析とともにその新たな魅力を開拓して見せたことは評価できる。対照的に、最終章で扱った現代作品『クレンズド』については、欧米での注目が広がっているが、まだあまり批評が書かれていない劇作家を取り上げ、作品の本質に迫る斬新な解釈を示す論考となった。

本論は、メタドラマが社会の秩序回復に寄与する傾向のあるエリザベス朝と、逆に無秩序と唯我的な方向に働く現代という二極性を全体としてきちんと提示してはいるが、終章におけるその対比の掘り下げはそれほど徹底したものではなく、やや控えめな印象を受ける。また、第1章でメタドラマの定義を明示していることは賢明であるが、その適用範囲がなお広範に過ぎるのではないかとの審査員からの指摘もあった。

対して、個別の作品論としての各章は完成度が高く、すでに全国規模の査読付き学術誌に掲載されたものも複数ある。また、石田氏の関心の幅は非常に広く、第1章のフレイザーの神話学やイコノグラフィ、第2章のフーコーの監視論、第5章のカイヨワの遊戯の理論、第6章の絵画におけるシュルレアリズムという具合に、多岐に渡る学問分野やその理論を盛り込んでいる。これらは、近年の一部の研究に見られる機械的でスノビッシュな他分野の適用ではなく、説得力を持って作品理解に寄与しているという点で真に学際的な性質を有している。大胆な発想は細やかなテキスト分析によって手堅く裏付けられており、研究者として十分な成熟を示している。

石田氏のもう一つの特徴としては、演劇という表現形態の本質は何かという命題がつねにどこか意識されていることが挙げられるだろう。メタドラマという自らの選んだテーマに狭く捉われるのではなく、演劇(play)が遊び(play)であることから発想を広げたり、観客を置き去りにして自身だけを欺く主人公像に演劇の本質を見出したりという考察には、賛否が分かれるかもしれないが、その柔軟な姿勢は非常に刺激的であり、研究者としてのスケールの大きさを感じさせるものである。石田氏には演劇だけでなく、小説や絵画など他のジャンルへの関心と知識が備わっているため、今後その堅実性を失うことのないよう注意しながら、ジャンルの枠を超えた幅広い活躍を期待したい。また、エリザベス朝と現代の比較について、より研究を深化させることも期待される。

以上のことから、論文審査委員会は、本論文が課程博士号に充分値する優れた研究であると全員一致で結論した。